

# 宗教的情操教育の問題

— 仏典童話の意図 —

花岡大 学

(奈良文化女子短大教授)

1

政治のことも大切なことだし、経済のこともゆるがせにはできない。だが、今わたしたち大人が、いちばん真剣に考えなければならぬことは、なにも国際児童年だからというのではなく、「子どもたちの教育の問題」ではないかと、わたしは思っている。

なるほどわたしは「子どもたちの教育の現場」にはいない。そんなところから先生方は、「今の子どもたちのほんとうの姿を知りもしないで、ごちゃごちゃいうな」と、おっしゃるかもしれない。

だがわたしは、子どもを読者対象とする児童文学の創作を生涯の仕事として、五十

年近くも書きつづけ、現になお書きつづけている者である。その仕事をおし進めるためには、当然のこととして、可能なかぎり綿密に子どもたちを観察し、子どもたちのことをあれこれと考える。

それでそんなことはめったに口に出したりはしないが、先生方が「子どものことは日常接しているわたしが、いちばんよく知っているのだ、素人は黙ってろ」というようないい方をされると、つい「なにお」とひらきなおりたくなる。「あんなたちが知っている教育現場における子どもというもの、なんらかの意味でポーズをつくっている子どもたちで、しかも教育という眼鏡をかけて見ている子どもたちであり、それは子ども的一面にはちがいないが、子ど

もたちには、そういうポーズをはずしたはだかの一面もあり、そいつを全体的に捕えることができるのは作家の眼だ」などといひ返したくなるわけだ。

むかし吉岡たすく氏が現役のころ、彼の主宰する小学校の先生方はかりの全国集会に、金沢嘉市氏と招かれた講演会でついそんなことを口走り、喧々囂々の非難を受けて舞台に立往生したことをなつかしく思い出すが、いずれにしろそんなことは、ここではテーマにさして関連を持たない、どうでもいいことだといわねばならない。

とにかく最近の新聞や雑誌に、にぎやかに報道されている小中学生の非行や自殺といった、きわめてショッキングなニュースだけをおさえても、今の日本の子どもたちが、いかに危い状況のなかにおかれているかということは、おそらく誰れの目にも、ある種の「おそろしさ」をもって受けとられているにちがいない。

とくにその年代の子どもたちをあずかっている学校教育の現場の先生方や、その子どもたちの大事な家庭教育を担当している親たち（わけてもおかあさんたち）にとっ

ては、より切実な、やりきれない問題であることはいうまでもない。

そんな事件が、自分の学校、自分の家庭に起った事件ではないからといって軽く見過したり、今までうまくいっていたのだから自分の学校なり家庭なりに、そんなことが起るはずはないなどと、楽観したりしておれるはずはなく、おそろくめいめいに与えられた「現代教育の深刻な問題」「ゆゆしき事件」として、教育者（もちろん親たちをもふくめて）としてこれに対処する何らかの方策を考えておられぬはずはないと思われる。（わたしにとっても当然よごとではない）

では、そうしたいまわしい事件が、なぜあいついで爆發するのであろうか。

それにはもちろんさまざまな原因がからまりあっていることであらうが、その最大の原因は、「情操の欠如」にあるといっているのではないかと、わたしは思っている。

つまり子どもたちの心が、「うるおい」をなくし、「しめりけ」をすっかり失ってしまつて、「かさかさ」に乾き切つて、「ばらばら」になつてしまつてゐるからだとい

うわけである。

それでは、なぜ子どもたちをそういう状態に追い込んでしまつたのであろうかと考へてみて、それは、大人たちのあいだに、ほしいままに跳梁している「エゴイズム」が、その精神風土を砂漠化させ、人間関係を孤立化させてしまつてゐるという「冷い狂い」が、いつのまにかじわじわと子どもたちの心に浸潤してしまつたからだともいえるが、わたしはいちばん顕著な理由として考えられることは、学校教育や家庭教育が「知育偏重の教育」に陥つてしまつて、まっとうな人間教育をするために欠いてはならない、「情操教育」を軽視するということ、まちがった方向をとつてしまつてゐるからだと思われる。

すくなくとも教育者といわれる人なら、子どもたちにとって「豊かな情操をはぐくむ教育」が、いかに大切であるかということとは、百も承知してゐられるにちがいない。

だが、あるいは戦争と呼ばれ地獄と呼ばれている現在の「受験制度」のなかで、それに打ち勝つていくためには、テストテストと「知育」一辺倒に子どもたちを追いま

くつていくよりほかにどうしようもないといわれるかもしれない。

しかも親たちはわが子の受験ということになると、にわかに狂的といえるほどに斜視的となり、学校教育の在り方にまでのさばりではばかりでなく、先生方の生活をおびやかすほどの利己的圧力を加えたりなどして、いよいよ救いがたい「ぬかるみ」に教育を陥没させてしまつてゐるのが現況だともいえる。

しかし現況が、どうにもならない「ぬかるみ」に陥つてゐるからこそ、そこに重大な問題がある。

どうにもならないからといってそんな教育を当り前のように持続しておれば、子どもたちの非行だの自殺だのというような事件にとどまらず、自分のことしか考えることができず、そのために他をつきのけおしのけるばかりでなく、他の命さえも軽く見るような心の冷い子どもが育ち、やがて今の大人の状態よりもさらに混乱した「おそろしい社会」があらわれてくるにちがいないからである。

それはいい易くして行い難いことである

かもしれないが、今こそ教育者（先生方、親たち）が勇気をもってその落ちこんでいる「ぬかるみ」からはいあがり、子どもたちの「情操教育」を、一刻も猶予のできない緊急事としてじっくりと考えるべきではないかと思われるのである。

「情操」とは、「高尚な心」の働きのよって生ずる複雑な感情のことだといわれているが、したがってその「高尚な心」とは、自分というものを離れて他のことを考える大きな心だといってよく、その働きから生ずる複雑な感情とは、「やさしい心」「あたたかい心」「思いやりの心」だといってよい。

つまりわたしは、それはそのまま「宗教的情操」だといっていいと思っている。

「宗教」といえば公立学校においてはすぐ「教育基本法」の「特定の宗教教育をやっているといけない」という条文におびやかされてそっぽを向き、そのすぐ後で「宗教に関する寛容の態度を尊重しなければならない」（宗教的情操教育）とでていることを、見て見ぬふりをしている偏狭さが、教育方向のまちがいに拍車をかけているが、そん

な偏狭なちいささをのり越えて、「宗教的情操教育」の育成こそが、先生方および親たちのやらなければならない、いちばん肝要な事柄であるといわねばならない。

その「情操教育の方法」というと、それは千差万別の子どもの個性に応じて、「音楽教育」「絵画教育」その他いづれでもいいが、わたしはそれのもっとも有効な方法は、ほとんど例外がないといっているくらい「お話」が好きである子どもたちに、文学作品を読ませる教育、つまり「文学教育」をおし進めることにあるのではないかと思っている。

なぜなら子どもたちは「知識」といったものは「知性」によって受けとり「記憶」していくものであるが、「文学」といったものは「感性」によって受けとり、それがすぐれた作品であればそれは文学の機能として子どもたちの心に「感動」を与えるものであるからである。

「感動」というのは魂の底からゆり動かされるという状態で、したがって「感動」したものは心の奥底に浸透し、生涯を通じて消え去らず、その人間形成の上に大きな役

割をはたすということになるといい。

そんなことからわたしは「文学教育」というものを重視してもらいたいと希望するわけで、わたしがここ十数年間「仏典童話」という創作に打ち込んできた意図、願ったものも、その点においているものである。素材から仏教説話に限定しての仕事なので、これは公立学校までのひろがりを考えるのは無理かもしれない。

では、わたしの今もおさかんに書きつづけている「仏典童話」とは何かということとを、簡単に述べておきたい。

## 2

わたしが「仏典童話」と呼んでいるものは、従来の「仏教童話」といわれているものとは、まったく異質のものだと自分では思っている。（最近今まで書いた三百篇近いものを集大成し「仏典童話全集」八巻として「法蔵館」から出版したばかりなので、それを読んでもらったら、そのちがいはすぐ理解してもらえらるものと思う。）

いうまでもないことながら、たくさんある「仏教経典」のなかには、おびただしい

仏教説話（インド伝承のむかし話のようなもの）が、主として「譬喩譚」、つまり「たとえ話」の形ででている。（勿論「本生譚」もある。）

教義を聞き手に説明するための「たとえ話」であるから、それはもちろんきわめて平易で、しかも適切で、それゆえにいづれも味い深いものばかりであるといつてよい。それに心を打たれたわたしは、児童文学をやっていただけに、すぐこれはこどもたちにも十分「通じるもの」であるにちがいないと、はたと気づいたのである。

そんなことはとくに多くの仏教者によって気づかれ、それを子どもたちにもわかるように書きなおすという仕事（それを再話というのだが）、今までもさかんに行われて、それを「仏教童話」と呼ばれてきたわけである。

それを頭から否定し去るわけではないが、それをただ子どもたちにわかりやすいように再話しただけでは、「たとえ話」の背後には必ずそれを「たとえ話」で説明する教義があるわけだから、当然のこととして、いわゆる「説教くさい話」になってしまっ

ている。

子どもというものは、宗教にかぎらず、道徳にかぎらず、すべて「くさい話」というものはあまり好きではなく、読んだり聞いたりしていても、それはその心の表面をなでて素通りしてしまうに過ぎない。

せっかくの味い深い話も、それでは駄目だ、わたしは思ったのである。

それを子どもたちの心の奥底に浸透させ、消え去らない形で刻みつけなければならない。つまりその話を、「感動的」に受けとらせることが必要であり、そのための唯一の道は、それをすぐれた文学作品にするよりほかはないと考えたわけで、そこにわたしの「仏典童話」というものがあるわけである。

わたしはそこで、文学としての「仏典童話」を創作する方法として、もちろん「仏教経典」のなかの「たとえ話」に取材はするが、「仏教童話」のやり方とは異り、いったんそれをわたしの心のなかに取り入れ、ばらばらに咀嚼し、どろどろに消化してしまつて、その上で、いささかも原典にこだわることなく、場面の転換や登場人物の増減など自由な改変を加えることもおそれず、

ただもっぱらそれをひとつの文学作品に結晶させようとしたのである。

だがそれは、普通の文学作品とおのずからちがったものでなければならぬが、その独自性というものは、むきだしの形ではなくてその作品の底辺に、「あるとわからない形」しかも必ずあるという形」で、「仏教精神」というものを踏えているということに置いていたことはいうまでもない。

それではその「仏教精神」とは何かということになるが、それはかの有名な「捨身飼虎の話」のクライマックス、すなわち今まさに餓え死にしようとしている七匹の子どもの虎を抱えたおかあさん虎の姿を見たとき、山中のこととて食べさせるものは何もなく、自分の肉体を無理に食べさせることによつて、八匹の虎の命を助けてやったという、その王子のけなげな行為から、わたしは「仏教精神」とは、その「捨身の心」だといつてよいといつていたのである。

しかも王子のその「捨身の心」は、餓死寸前の虎の命を救おうとしてみずからの身をなげだしているが、それは虎の「ために」といった恩着せがましい心からでもないし、

そうしたさまざまな善根功徳を積むことによって、仏になるうといった打算や計算の心もなく、「自己犠牲」などといった思いあがった心などもなく、餓死寸前の虎の命をまのあたり見たとき、ただ「そうせうにいられないからそうした」ものであって、そこになにの「はね返りを求める心」などは、つゆちりほどもないといった、まったく感動的な、純粹至高な心であり、だから「捨身の心」とはそのままそれは、一切衆生に対して平等で差別のない、仏の「慈悲の心」そのものだといつてよい。

「經典」にも「仏心とは大慈悲心これなり」と示されているように、「捨身の心」「慈悲の心」とは、「仏の心」そのものであるというわけで、なるほどそれは、けだかくもとおい「絶対愛」「無償の愛」ではあるが、そんなものを踏えろといつても貧（むさぼりの心）瞋（怒りの心）痴（おろかな心）といった三毒の煩惱といったものにふりまわされて、かたときもそこから離れることのできない自分をかえりみたくきに、そんなことは思いもおよばないことだとだれしもが考えるにちがいない。

それはたしかにその通りで、みずからの方でそこまでいこうと、いくらもがいてみても、生身の身体をもっているかぎり、なかなかそこまでゆきつけそうにないほど、それははるかに遠い至高の心といわねばならない。

それなら絶望するよりはかはないのかというところではなく、広大な仏の慈悲はそうした無力無能の者をもそこまでいきつける道をあらかじめさし示していただくわけで、それが「南無の世界」だというわけである。

すなわち「南無の世界」とは、すえとおらぬきたない「はからい」のすべてを、いさぎよくかなぐりすてて、素直に仏に全托する「信心」のことであり、そのときただちに「仏の心」「慈悲の心」「捨身の心」を仏からたまわる身にさせていただけるといふのである。

それゆえに、わたしの「仏典童話」が、「あるとわからない形で必ずあるという形」で踏えなければならない「仏教精神」とは「捨身の心」であり、それはわたし自身が「信心」を得させてもらおうということを先

決問題として、そこにまっとうな「仏典童話」が生れてくるものといわねばならない。

「捨身の心」「慈悲の心」といった表現をとると、なにがはるかに遠いものという感じがまぬがれたいが、そこにまでやがて高められるかぎり、それと相即する心として、ごく身近なことばでそれをひらたくいえば、「やさしい心」「あたたかい心」思いやりの心」ということになり、それがわたしのいう「宗教的情操」というものである、したがってわたしの打ちこんでいる「仏典童話」の仕事は、現下もつとも緊急なその情操の育成にとつて、打ってつけの大切な作業であると、ひそかに自負しているものである。

### 3

宮沢賢治の童話は、今でこそその価値が不朽である、世界的名作としての評価を受けているが、それらの作品が書かれたのは原稿などひとつも売れない不遇の時代であり、病苦とたたかいながら、「法華經」の「如来寿量品」にでている、先にふれた「捨身飼虎の話」に身をふるわすほどに感

動して、その精神を文学化することに鑢骨の思いでとりくんでいるが、死の二年前ころ手帳に書いたつぎのような記述には、賢治の創作姿勢といったことがあきらかに示されている。

「高知尾師ノ奨メニヨリ、法華文学ノ創作、名ヲアラハサズ、報ヲウケズ、貢高ノ心ヲ離レ（奉安、妙法蓮華經全旨、立正大師滅後七百七拾年）、筆ヲトルヤマツ道場觀、奉請ヲ行ヒ所縁、仏意ニ契フヲ念ジ、然ル後ニ全力之ニ従フベシ、断ジテ教化ノ考タルベカラズ、タダ純真ニ法華スベシ、タノム所オノレガ小才ニ非レ、タダ諸仏菩薩ノ冥助ニヨレ」

念のためにその意味をあきらかにすると、高知尾師の奨めにしたがって、法華文学を創作するようになったのは、名前を売り出すためでもなければ、それによって報酬を得ようとするためでもない。

「貢高の心」すなわち物質的なね返りを求める心というものを投げうち、法華經全品を奉安して、まず「道場觀」、すなわち道場とは、釈尊が悟りをひらいた場所のことをいい、一般には法を修める場所のこと

のだが、作品を書くその場所のことを法を修める場所とみて、「奉請」とは諸仏諸菩薩においてを願うということであり、かわりあいのある諸仏にまもられて、仏意に契うことのみを考え、筆をとって全力をあげて創作に当らなければならない。

しかしその際創作をするということは、断じて法華經によるその教義を讀者にひろめて、これに帰依させるといった考えなどあつてはならない。ただひたすらに「法華」すなわちその法によって救われるよろこびだけにひたるという心でなければならぬ。自分のちいさな才能といったものによりかかるといったことは、すっぱりやめて、自分が創作するという仕事は、ただ諸仏諸菩薩の目にみえない大きな加護だけによつて、そうさせてもらっているという精神で書かねばならないといっているのである。

この手記で特に注意しなければならぬ点は、つねに道場觀奉請を行うといった謙虚で純粹な気持で、ただ仏意すなわち仏心にそうこと、「捨身の心」を念じて執筆していたということ、大乘仏教の真意としての法華經の宣布ということが、賢治の文

学の究極目的であつたといえ、そのところで賢治は文学と宗教というもののけじめをはっきりと把握し、文学というものは断じて宗教を布教するための手段であつてはならず、いちばん大切なことはあくまでもそれは文学でなければならないとしているところであり、それを「断ジテ教化ノ考タルベカラズ」ときっぱりといい切っていることにある。

もちろんわたしなど賢治に比すべくもない非才ではあるが、わたしの「仏典童話」についての考え方は、上にあげた二つの点においてはびつたり符合するものであることは、くりかえし述べるまでもない。

ただちがうところは、賢治はその二つを踏えて、その素材をひろく一般に求めているのに対して、わたしはそれを「仏教經典」のなかの「たとえ話」にのみ限定して考えているというところにあるといわねばならない。

とにかく、わたしは、すでに老いすぎているということは事実であり、残された命もわずかであるということは十分自覚しているが、そのわびしい自覚があるだけによ

けいに燃えたち、「全力之ニ従フベシ」と自分を叱咤しながら仕事をづづけている。

ただ願うところは、その深い意味をもった「たとえ話」を、すぐれた文学作品に結

晶させるということだけが一図な願いであり、それがさいわいにすぐれた作品に昇華されて、子どもたちに「感動的」に受けとっていただくことができたならば、おのずからそこに現下もつとも肝要に考えねばならない「やさしい心」「あたたかい心」「思いやりの心」といった「宗教的情操」が、はぐくみそだてられることになるわけ、人と人との「つながり」ができて、児童福祉の最高のめあてである、子どもたちの「しあわせ」につながるものだとかたくなに思っている。

そのためにわたしのやらねばならないことは、作家として「断じて教化ノ考タルベカラズ」の真摯な姿勢で、文学としてすぐれた「仏典童話」を書きつづけるよりほかになにもないが、それを学校教育の場でとりあげることに抵抗があるならば、すくなくとも現代教育の危機をしかと認識された親たち、おかあさんたちによってそれを

「宗教的情操」育成の教材として十二分に利用していただき、このもしき教育的成果

## 施設養護問題の一側面から

須賀賢道  
(佛教大学助教授)

をあげていただけるよう熱望して止まない。

### 一、ある作文

がまんの子

「はっきりにって、まだまだ子供のような私が、もう一人前の人間となって働きたいくんですから、不安な気持ちです。学校の人は、たいてい進学します。ですが私達は、学生時代を卒業して、社会人となるのです。いままでのような、わがままは許されません。親と離れ一人で働き、そして食べていかねばなりません。そしたら、自分の働いた月給で、親のせわをしてあげなくてはならない。」

まだ、私達は若い、おしゃれもしたい、

遊びにも行きたい。それをじつとがまんしなければいけないのです。<sup>(1)</sup>

中学校の卒業を目前にした児童の、進学をあきらめ、したいこともせず「じつとがまんしなければいけない。」と言わせている現実は何なのだろうか。

「がまん」は、美德であり、望ましい徳目であるともいわれる。たしかに「たえること」「まつこと」を失った生き方や態度は、批判されねばならないであろう。目的をもち、目標をたてて、それに向って努力し、自分の力で築きあげていくことなしに、安易に手に入れ望みをかなえようとする姿勢は厳にいましめられねばならない。